

# これは私の体である

—— 説教論のためのテーゼ ——

江 口 再 起

## I. はじめに —— 言葉をめぐる状況

1. キリスト教信仰のすべては説教につきる。たとえばルターは、ギリシャ語の「ケリュースン（宣教する）」をほとんど「predigen（説教する）」と訳している。更に言えばルターは、「Predigt（説教）」という言葉で、神が人に語ることに同時にまた、人が神に呼びかける（礼拝する）こととしても用いている（Jürgen Henkys, Ansätze des Predigtverständnisses, in: Handbuch der Predigt, 1990）。説教にこめられた意味は、広く深く重い。

2. しかし、その説教が今日、危機に瀕している。現代における言葉をめぐる状況がその危機を端的にあらわしている。J. モルトマンは今日の言語状況を次のように分析する（「神の言葉と言語」、『神学の展望』所収、新教出版社、1971）。(1)言語氾濫と言語喪失（「ルターの言語はほぼ八千語……今日のマスメディアの影響にある町の人々の語彙は三十万から五十万の間を動いている」）。(2)言語活動に、保存、再生、多様化など道具だてが多過ぎる。(3)映像やイメージによる言語の崩壊（視覚の時代）。(4)言語と現実の不一致（名と名づけられたものの不一致、つまり極端なノミナリズム〔唯名論〕の進行）。—— 説教の言葉は、この危機のただ中に立たせられている。

3. だが、それでも説教は語られつづけられねばならない。なるほどウィトゲンシュタインは「語りえないものについては、沈黙しなければならない」（『論理哲学論考』）と語った。とはいえ、彼はまたこうも語る。「それにもか

かわらず、我々は言語の限界に対して突進するのである」(「ウィトゲンシュタインとウィーン学団」、『ウィトゲンシュタイン全集』第五卷、大修館)。言語の限界に対する突進、まさに説教こそが、その突進そのものである。

## Ⅱ．説 教

4. 「これは私の体である」というキリストの言葉こそが、説教と sacrament の元型＝起源である。いや正確に言うべきだ。「これは私の体である」はキリストの声である。そして声には、精神(言葉)と身体が分ちがたく重なっている。そこで「これは私の体である」は原言語(Urwort)と言うべきであり、このときまさにキリストが現臨(リアルプレゼンス)する。つまり、この原言語「これは私の体である」から、いわゆる言語(Wort)と身体(Leib)が分節化する。言語として分節化されたものが説教であり、身体として分節化されたものが sacrament なのである。「初めに言葉があった。……言葉は肉となって、わたしたちの間に宿られた」(ヨハネ福音書 1: 1, 14)。
- 「Leiblichkeit ist das Ende der Werke Gottes (身体性は、神の業の終わりである)」(F. C. エーティンガー)。

5. いわゆる聖餐の設定辞(verba institutionis)でもあるキリストのこの言葉「これは私の体である」について、ルターは次のように言う。「説教は、キリストが『これは私の体である。これは私の血である』と言われ、ミサを設定された、その御言葉を説明するものにほかならない……。全福音は、この契約を宣言すること以外の何であろうか。キリストは、全福音を要約して、この契約、または sacrament の言葉の中に含められた」。「主がミサを設定された時、『私を記念するために、これを行なえ』と言われたが、主はこれによって『あなた方が、この sacrament と契約を用いるごとに、私について説教しなさい』と言おうとされたのである」(「新しい契約、すなわち聖なるミサについての説教」、『ルター著作集』I/2, 聖文舎, WA 6, 373f.)。

6. したがって、説教とは言葉においてキリストが現臨することである。また、サクラメントとは、身体（パンとブドウ酒）においてキリストが現臨することである。そして教会とは、その現臨の生起するところなのである。（「唯一の聖なるキリスト教会は、その中で福音が純粹に説教され、サクラメントが福音に従って与えられる」、『アウグスブルク信仰告白』第七条）。
7. かように説教とは言葉であるが、それは「神の言葉」を「人の言葉」で語るなのである。したがってまず、説教はあくまでもどこまでも「神の言葉」である。ルターは言う。「説教は神の言葉であって、人の言葉ではない。神は私に言われる、『汝よく教えたり、そは汝によりて我語りたるが故なり、その言葉はわが言葉なり』と。自ら語った説教について、こう言うことのできぬ者は、説教しない方がよい」（「ハンス・ヴォルストに抗して」、WA 51, 517）。まさに「*Praedicatio verbi Dei est verbum Dei*（神の言葉の説教が、神の言葉である）」（布林ガー「第二スイス信条」）のであって、ボンヘッファーは、説教を「神の言葉の自己運動」とさえ言った（『説教と教会』、新教出版社、1975）。
8. しかし、かかる「神の言葉」を「人の言葉」で語るなのである。つまり説教は二重性をもつ。パウロはこう言っている。「私たちから神の言葉を聞いたとき、あなた方は、それを人の言葉としてではなく、神の言葉として受け入れた。事実、それは神の言葉であり、また信じているあなた方の中に現に働いているものです」（Ⅰテサロニケ 2：13）。ルターもこう言っている。「私は説教を聴く。しかし、いったい誰が語っているのか。牧師か。いや、そうではない。牧師に聴いているのではない。なるほど声は牧師のそれである。が、私の神が、そこで説教され、み言葉を語りたもうのである」（1540年のヨハネ 4 章についての説教、WA 47, 229）。
9. こうした説教のもつ二重構造は、「*Vere Deus, vere homo*（真の神にして真

の人)」というカルケドン信条の「キリスト両性論」の構造でもある。そこで、こうした説教の捉え方を「キリスト論的説教論」と呼ぼう。すでにカール・バルトも、次のように指摘している。「説教とは、神ご自身によって語られた言葉である」、また「説教とは、そのために特に召された者によって、神ご自身の言葉に仕えようとする試みである」、そこで「究極のところ、この二つの定式の背後にあるのは、イエス・キリストにおける神と人間の統一についての、キリスト論的な決定的な命題である」(1932年ボン大学での講義「説教教学」、『神の言葉の神学の説教教学』、日本基督教団出版局、1988)。

10. 説教は「神の言葉」、すなわち神が語っているのである。したがって、そこには「権威」がある。Predigt aus Vollmacht (H. J. クラウス)。キエルケゴールは『使徒と天才との相違について』の中で次のような言い方をしている。「説教する権威というものは、特別の質であって、使徒職への召命によって使徒に与えられ、按手礼によって牧師に与えられているのである。この権威が行使されることによって、講話は『説教』となるのである。説教をするとは、まさにこの権威の行使に他ならないということ、このことが現代においては全然忘れられている」(橋本鑑訳、新教出版社、1948)。

11. 神が語るということは、また次のようなことでもある。すなわち、まず第一に説教は「キリストの声」なのだ。今、ここにキリストが現在(リアルプレゼンス)し、声をだし語っている。したがって無条件の権威がある。そもそも、イエス・キリストとは、我々人間にとって徹底して一つの声なのである。「キリストは何一つ書かなかった。だがキリストはすべてを語ったのである」(ルター、「第二回詩篇講義」, WA 5, 537)。だから、説教とはキリストの声なのである。そこでルターは言う。「キリストの言葉を語るなら、その口がキリストの口であると誇ってさしつかえない。私の言葉は私のものでなく、キリストの言葉であると、私は確信している」(「全てのキリスト者が騒乱や謀叛に対し用心するようにとのM. ルターの真実の勸言(1522)」, 『ル

ター著作集』1/5, 聖文舎, WA 8, 683)。

更にまた, そうであるからルターは「口の説教 (mündliche Predigt)」を強調する。「(福音とは) 本来, 書物の中にあたり, 文字で記されたものではない。それはむしろ, 口の説教であり, 生きている言葉であり, 全世界に大声で響きわたり広がるのを人々が聞くところの声なのである」(1523年のペテロ書簡についての講義説教, WA 12, 259)。説教の口頭性である。カール・バルトは『教会教義学』1/1の「神の言葉の三形態」を論じたところで, 「説教の口頭性」と「聖書の書物性」を対比させ考察している。またJ. デリダは西欧における音声言語の優位を指摘する(もっとも彼は, それをロゴス中心主義と呼び脱構築せんとするのだが……)。

12. 神が語るということは, 第二に, また次のようなことでもある。すなわち, 説教は「神のみ名によって」語られるのである。なぜなら「Nomen Dei est Deus ipse (神のみ名が, 神ご自身である)」(カロフ)。橋本鑑は, 「インマヌエル・アーメン」という称名をこそ説教とみなす。「我等の称える御名こそは『福音』そのもの, 『神の言葉』そのものである。我らは間断なき称名の中にあって聖書を積み明かし, 御言葉を宣べ伝えねばならない」(「福音的称名序説」, 『インマヌエル——橋本鑑遺稿集』, 新教出版社, 1966)。あるいはR. ボーレンは次のように言う。「み名を具体的に発言する力を持つような人があれば, その人はそれだけで根本的に言って, すでに十分語ったということになろう。説教の行為の一切は, み名に還元せしめられるからである。ただみ名を呼ぶことからだけ成り立つような説教は, 想像しうるにとどまるだけだろう。しかし, それは無益なものではない! 説教一般にとってのよき範例となるのである」(『説教学I』, 日本基督教団出版局, 1977)。

13. 神が語るということは, 第三に, 説教は「出来事」を生起させるということである。説教の出来事性。つまり「言葉の出来事」[Sprachereignis (フックス), あるいは Wortgeschehen (エーベリンク)]である。ルターは, かか

る事態を説く際にしばしばイザヤ書55：11を引用した。「私の口から出る私の言葉は、むなしくは私のもとに戻らない」。ルターは言う。「神の言葉は、神の行為である」（「第一回詩篇講義」，WA 3，152）。事実，彼は「これは私の体である」という言葉を，そのものずばり「行為言語 Tatwort (Thätelwort)」と呼んでいる（『キリストの聖餐について，信仰告白』，WA 26，283）。以下，いくつかのルターの言葉を引用しておこう。「一体，言葉より無意味に見えるものが他にあらうか。だが，その言葉を神が語るとき，その言葉によって表わされた事物は，直ちに存在に跳びこんでくる」（「詩篇90篇講解」，WA 40/Ⅲ，522）。「神の言葉は力があるので，それが発言されるとき，幼児と同じように無感覚で無力な不敬虔な心さえ，変えるほどである」（「教会のバビロン虜囚について」，『ルター著作集』Ⅰ/3，聖文舎，WA 6，538）。「人の言葉は心の本性を本質的に自らのものとするのではなく，ただ指し示すものとして，あるいはしるしとして，そうなのである。それに対し，神においては，言葉は単なるしるしや像をもたらずだけではなく，（神の）全存在を自らのものとする。言葉は，全き神なのである」（「ヨハネ一章講解説教」，WA 10/Ⅰ/1，188）。

14. 説教の出来事性とは，より具体的には，(1) 罪のゆるしの生起であり，(2) 神の呼びかけに対する信仰（決断応答）の生起であり，(3) 「キリストのかたち」の生起，つまり教会の形成である（「私の子供たち，キリストがあなた方の内に形づくられるまで，私は，もう一度あなた方を産もうと苦しんでいます」，ガラテヤ4：19）。こうしたことが，説教において生起する。
15. さて，説教とは「神の言葉」を人が語るのである。したがって説教の実際においては次の三点に注目したい。(1) 神の言葉が，「正しく」，「公けに」語られねばならない。そこに「教会の秩序」，すなわち教職按手の必要性の根拠がある（ルター『教会の教職の任命について』，1523年，WA 12）。(2) 説教は，具体的な牧会（状況）の中で語られねばならない。そこに恒常的な説教職の

必要性の根拠がある。このことを、説教と牧会の循環性と呼んでもよい。ボンヘッファーは次のように言っている。「牧会とは、説教のつとめを更に徹底させて、個々人にまでみ言葉を届かせることである」(『説教と牧会』, 新教出版社, 1975)。(3)したがって、説教を語る者には、信仰(情熱と無私の心)とたえざる訓練が必要である。つまり専門性が要求される。

### Ⅲ. 説教を語る

16. 説教は根本において神が語る(キリストの声!)のであるが、具体的には説教を語る者について、説教職の「神的設定」性と、キリスト者の務めの「万人祭司」性の二極の中で考えてゆくのである(ルター派教職論)。H.リーベルクはそれをルター教職論における「二極性 *Zweipoligkeit*」と言っている(H. Lieberg, *Amt und Ordination bei Luther und Melanchthon*, 1962)。つまり、万人が神の前に直接的に立ちキリスト者の務めをはたすが(万人祭司性)、その中から神の言葉を「正しく」、「公けに」語るために、特定の人に「み言葉の奉仕の務め (*Ministerium Verbi Dei*)」への委託が生じるのである(神的設定性)。

ルターは次のように言っている。「神は説教職を設定された」(「主の体と血の sacrament についての勧告」, 1530, WA 30/II, 598, また「神が福音と sacrament を与える説教職を設定された」[CA 5])。「キリスト者の集まり, すなわちゲマインデ[個々の教会]は, すべての教えを判断し, 教職を招聘し, 任命し, 罷免する権利と力を持っている」(WA 6)。つまり「(神の) 召命と(ゲマインデの) 任命とが, 牧師と説教者をつくる」(1531年の受難説教, WA 31/I, 211)。要するに「ルターは, キリストによる説教職の設定と, ゲマインデにおけるある人への説教の権利の委託の実践的基礎づけとの間に, 対立をみていないのである」(W. Elert, *Morphologie des Luthertums*, Bd. I)。

繰り返して整理して言えば, 説教職(教職)の存在は, 神との関係の中で神的設定性としてあらわれ, したがってみ言葉が「正しく」語られうるので

あり、その制度的表現が按手礼 (Ordination) である〔身分としての教職〕。それに対し人 (会衆) との関係の中では万人祭司性が軸となり、したがってみ言葉が「公けに」語られることとなり、その制度的表現が招聘 (Vokation) ということになる〔機能としての教職〕。

17. さて、キリスト者の務めは種々あるが、その中で「み言葉の奉仕の務め (ministerium Verbi Dei)」, すなわち説教職こそがその中心である。ルターが説くところを聞いてみよう (『教会の教職の任命について』, 1523年, 『ルター著作集』 I/5, 聖文舎, WA 12)。キリスト者には七つの務めがある (説教, 洗礼, 聖餐, 罪のゆるし, 祈り, 捧げもの, 教えの判断)。しかし、その中で、「第一の、全ての中で最も重要な務めは、神の言葉を教えること (説教) であり、そのことに他の一切は左右される」。つまり「教会においては、一切はただみ言葉によって成り立つゆえ、人々に神の秘義を賦与する公けのみ言葉の奉仕は、聖なる任命によって秩序立てられねばならない」。したがって「もし、み言葉を教える務めが、誰れかに委託されると、教会においてみ言葉によって生ずる全てのことも、すなわち洗礼を施すこと、聖別すること、つなぐこと・解くこと、祈ること、教えを判断することの務めも、その者に委託される」。

18. 中心の務めとして「説教」の務め。かかる務めをはたす説教者の実存とはいかなるものか。まず第一に、説教者 (牧師) は、自ら語るのではない。彼は神から聴いたことを語るのである。たとえばハイデggerはこう言っている。「聴くことは、語ることにあって構成的である」 (『存在と時間』)。そこで端的に K-P. イェルンスは、「説教するとは、聴き語ることである (Predigen ist Hörensagen)」と言う (in: R. Bohren/K-P. Jörns (Hrsg.), Die Predigtanalyse als Weg zur Predigt, 1989)。説教者の求道性と言えよう。

19. 説教者の実存として指摘すべき第二点は、説教者の矛盾性ということであ



る。繰り返し言うように、説教とは神の言葉である。それは事実、罪をゆるす言葉である。したがって、とても信じられない言葉である。こうした言葉を一体、誰れが語りえようか。不可能である。にもかかわらず説教者は説教をする。ここに説教者の矛盾性がある。ルターはそこで端的に次のように言う。「私は、説教壇を怖れていた」(WA. TR3, 3143b)。あるいはバルトもこう語っている。「我々は牧師(Theologe)であるから、神について語らねばならない。しかし我々は人間であり、その限りでは神について語ることはできない。我々は我々の当為(Sollen)と不可能(Nicht-Können)の両者を知り、まさにそのことを通じて神に栄光を帰さねばならない」(「神学の課題としての神の言葉」, 1922, 『カール・バルト著作集1』, 新教出版社)。そうであるから、ボンヘッファーはあえてこう言う。「恐らく私が全く信じることのできない言葉が、そこにあるゆえに、私は説教するのである」(『教会の本質』, 新教出版社, 1976)。

要するに、語る説教者自身には根拠がない。神に根拠がある。これは言うなれば救いをめぐっての信仰義認の教えと同じ構造である(救いの根拠は、人でなく神にある)。それゆえ、かかる説教論を「義認論的説教論」と呼ぼう。

20. にもかかわらず、説教者は「自分の言葉」で語るのである。借りものの言葉を使用するわけにはいかない。彼には訓練と祈りが必要である。つまり、説教者の実存として指摘すべき第三点は、説教者の専門性(訓練)ということである。

#### Ⅳ. 説教を聴く

21. あえて言えば「聴く」ことが全てである。パウロは言う。「したがって、信仰は聴くことによるのであり、聴くことはキリストの言葉から来る」(ロマ 10:17)。意義深いことにルターは、ここで、この「聴くこと」という語句を「Predigt(説教)」とドイツ語訳した(So kommt der Glaube aus der

Predigt)。信仰とは、聴くことなのである。親鸞も言う。「きくといふは、本願をききてうたがうころなきをきくといふなり。またきくといふは、信心をあらはす御のりなり」(「一念多念文意」)。聴くことの根源性。

22. 説教を聴く。しかし、誰れが聴くのか。——会衆が、説教者自身が、そして神ご自身が、聴くのである。そこで、まず会衆。聴くことが大切である。「わたしの愛する兄弟たち、よくわきまえていなさい。だれでも、聞くのに早く、話すのに遅いようにしなさい」(ヤコブ1:19)。バルトも皮肉をこめて言う。「もし信ずるなら、彼は聴くであろう。ところが、彼はしゃべっているのである」(KD I/1)。

聴くことは、しばしば受動的なることとして、低く評価される。しかし、そうではない。救いとは、罪のゆるしをいただくことであり、信仰とは聴くことなのだ。ルター的に言えば「喜ばしき受動性 (ein frolich leyden)」(『マグニフィカート』, WA 7, 550) である。

23. ルターは「耳の神学」を展開したと言えよう。彼は「喜ばしき受動性」と言うが、耳 (Ohr)こそ最もすぐれて受動的な器官である。ルターは言う。「福音は聴覚以外の途では、聴きとられない」(「ヘブル書講義」, WA 57, 139)。「悪魔が罪によって閉ざした耳を、み言葉が再び聞き、そして我々が神の言葉を聴くことは、すばらしい業である。……神がそのみ言葉をよく聴かせるために、こうして耳を与えて下さったということは、最も大きな業であり、最高の善行である」(家庭用説教集より, W<sup>2</sup> 13, 2319)。

ハイデッカーは初期の講義の中で、ルターの十字架の神学を論じているが、その中で「ルターにおける純粋な Hören (聴従)」を評価したのである (O. Pöggeler, Der Denkweg Martin Heideggers, 1963)。まさに「聴く耳のある者は聴くがよい」(マルコ 4:9)。

24. 説教を聴く。それを会衆が聴くだけでなく、語った説教者自身が聴くので

ある。言葉とは不思議なものである。というのは、言葉を語るとは、私の外の他者がそれを聴くと同時に、語っている私自身もそれを聴いているのである。ヘーゲルは『精神現象学』の中で次のように言っている。「言葉とは、他の人々に対して存在している自己意識である」。つまり「言葉は、自分を自分から分離するところの自己でありながら、……しかもこの対象性においてもこの自己であることを失わない」（『ヘーゲル全集』5，岩波書店）。つまり、説教者は、自らが語った説教を自らが聴いている。

いや、より正確に言わなくてはならない。説教者は、まず神から聴いたことを説教として語り（Hörensagen!）、そして、そのみか自らなしたその説教をも彼自身が聴くのである。つまり二重に聴く。そこでキェルケゴールは次のようなことを言うのである。「説教者は、その説教を会衆に向かって、その教化、共鳴のためにするのではなく、自分自身に向かってなす。……一切が失敗におわっても少なくとも聴衆の唯一人は信仰を堅くせられて帰宅する、それは彼自身である」（Gesammelte Werke, BdIV.）。

25. 説教を聴く。それを会衆が聴く、そして説教者自身が聴く。ところが更に、神ご自身が聴くのである。いやむしろ、神こそが説教の第一の聴き手なのである。説教は神が語る。そうであるならば、言葉の性質上、その語った言葉を、語った神こそがまず聴くのである。「耳を造った方が、耳を傾けられる」（R. ボーレン、『説教学Ⅱ』，日本基督教団出版局，1978）。

しかし、それにしても神が聴くとは、より正確にはどういうことか。その答えを、ヨハネ福音書16：13に対するルターの解釈から学ぶことができる。16：13とは、こうである。「しかし、その方、すなわち真理の霊が来ると、あなた方を導いて真理をことごとく悟らせる。その方は、自分から語るのではなく、聴いたことを語り、またこれから起こることをあなた方に告げるからである」。ルターは、1538年の説教の中で、この箇所を次のように解釈するのである。「ここで語る者と聴く者とに関して、父を説教者に、聖霊を聴く者としている。……語ること、語られたこと、聴くこと、これらすべては神的な

本性の内部で起こり、語る者と、言葉と、聴く者とは、神ご自身にちがいないのである」(WA 46, 59f)。

つまり、ここでルターは、説教を「語る者」を父、「語られた言葉」を子キリスト、「聴く者」を聖霊としているのである。三位一体の神において生起する説教という事態。説教は神(父)が語り、神(キリスト)が言葉(ロゴス)として語られ、神(聖霊)が聴く。かかる説教の根源的構造を、「三一論的説教論」と呼ぼう。そして、そうであるがゆえに、ルターはこう語ったのである。「私はただひたすら、われらの主なる神にのみ説教をしよう」(WA, TR 2, S. 421)。

## V. おわりに——交響的世界としての説教

26. これまでの論述をまとめておこう。説教は「これは私の体である」というキリストの声である。したがってそれは神の言葉である。その神の言葉を人の言葉で語る。つまり具体的には説教者の口から言葉が発せられる。しかもその時、説教者は神の言葉を聴きつつ語るのである。その語られた言葉を会衆が耳にする。いや、会衆ばかりでなく、語っている説教者自身が、その語った自らの言葉をまず聴いているのである。いや、いやそればかりではない。説教が神の言葉であるということは、なによりもまず語る神ご自身こそが聴くのである。すなわち、より詳しく言えば、父なる神が生みだし語ったロゴス(子なるキリスト)を聖霊なる神が聴くのである。かかる説教を会衆が聴く……。まさに説教とは、言葉と言葉が幾重にも響き合う交響の世界である。マルクス主義と実存主義を統合せんとした鈴木亨は、M.ブーバーや西田幾多郎に影響を受けつつ「交響的世界(響存的世界)」について語ったが、その言葉を借りれば、説教の空間とは、まさに交響的世界である。神のシンフォニー！

27. 言葉と言葉が重なり合う、交差する。言葉と言葉が重なり交差するのは、それらの言葉の間に差異があるからである。実際、最後の晩餐でキリストが

声として発した言葉、聖書に文字として記されている言葉、説教者が口で語る言葉、そして会衆一人一人が耳で聴いた言葉……これらの言葉には当然、差異がある。しかし差異があるからこそ、そこに交響的世界が出現する。したがって、かかる差異を「説教学的差異」と呼ぼう。

説教学的差異は、神の言葉の根源的豊饒性を示している。更に言えば、差異が存在するということは、神の言葉があくまで人の言葉ではない、人の言葉の外からやってくるということである。ルター的に言えば、「われらの外 (extra nos)」である。

そして、かかる差異が存在するからこそ、共に言葉に耳を傾け聴き入り、そしてやがて幾重にも交差し重なり合った言葉が焦点を結ぶ。その焦点に、イエス・キリストがリアルプレゼンス（現臨）する。説教とは言葉におけるキリストのリアルプレゼンスである。

28. 言葉が言葉の上に重なり合う、交差する。そして、やがて一つの言葉の中で、幾つもの言葉が重なり合って響いていく。説教の言葉とは、そういう言葉である。このことを言語論的に考えてみよう。ルターは、あの「これは私の体である」というキリストの言葉をメタファー（トロース）的な言語使用と捉え、ツヴィングリらの聖餐理解を批判した（『キリストの聖餐について、信仰告白』、1528, WA 26, 『ルター著作集』 I/8, 聖文舎）。すなわちツヴィングリは言葉を一義的（合理的）に考え、聖餐の設定辞 (Verba) である「これ（パン）は私の体である」を、「これは私の体を意味する」と解した。つまり、あくまでパンはパン、体は体であり、そこにあるのはパンそのものである（ツヴィングリ的一義的言語）。それに対してルターは言葉のもつメタファー性に着目し、メタファー的言語である「これは私の体である」が発せられたということは、パンがたんにキリストの体を意味しているのではなく、パンがパンでありつつ、同時にキリストの体であるという二重の現実 (simul 的現実)、つまり「新しい存在」（すなわちパンであるキリストの体、キリストの体であるパンという「新しい存在」）の出現を言い当てている

と解した（ルターのシムル的言語）。メタファー的言語は、現実のもつ二重性を言い当てることのできるのである。（E. ユンゲルは、「隠喩における真理」〔P. リクールとの共著『隠喩論——宗教的言語の解釈学』、ヨルダン社、1987〕で、「信仰の言語は、徹底してメタファー的である。神は、メタファー的言述の文脈の中でのみ、意味のある言葉となる」と述べ、上記の「メタファー的な言語に関するルターの見解」を考察している）。

説教の言葉とは、幾つもの意味が重なり響く「新しい存在」を言い当てるメタファー的言語なのである。

29. 説教の言葉とはメタファー的言語なのであるが、メタファーとは同一の言葉の中に、二重の意味をみることである。つまり「これ（パン）は私の体である」というメタファー的言語は、たんにパンを言語化しているのではなく、パンであるキリストの体・キリストの体であるパンという二重性の出現を言語化しているのである。そして、このように一つの言葉（対象）の中に二つの意味（文脈）を、すなわち二重性を受け取ることを、つまり現実の二重性（メタファー的現実）を受け取ることを「信」というのである。「信仰の問題は、『喩』の問題であった。……（そして）世界の二重の受け取り方を『喩』と呼ぶのである」（村瀬学「吉本隆明における『信』と『知』の調べ」、『現代詩手帖』1986. 12月臨時増刊）。ちなみに「知」とは、言葉の一義性をこそ基盤としている。したがって、あえて言うまでもなく説教の言葉とは、信仰の言葉である。

30. ところで説教とは繰り返せば、キリストの声であったが、イエス・キリストご自身、神性と人性という両性（二重）存在である（Vere Deus, vere homo）。つまり、キリスト存在そのものが、メタファー的存在なのである。「キリストの十字架そのものが、神のアレゴリー的な業である」（ルター「第二回詩篇講義」、WA 5, 245f.）。

そして、かかるメタファー的存在であるキリストの声であり、聖餐の設定

辞ともなった原言語 (Urwort)「これは私の体である」が、説教として分節化されメタファー的言語となるのである。キリストの位格的結合 (unio personalis) とサクラメント的結合 (unio sacramentalis) はメタファーにおいて類比できる。「ちょうどキリストにおいて二つの、別々の変えられていない本性が分かちがたく結合しているように、自然のままのパンと、キリストの真の体とが、聖餐の定められた行為の中で、この地上のいたるところに、ともども存在する」(「和協信条」根本宣言・第七条)。

キリストの存在が、説教の言葉が、そしてサクラメントが、メタファー的現実を形づくりつつ交響する。

31. R. ボーレンはその『説教学』を「情熱としての説教」という章からはじめたが、ここでは逆に「情熱としての説教」という項目で閉じよう。アリストテレスの『修辞学』によれば、言葉には三つの要素があるという。話す人、話されること、聴く人。そして、それぞれの軸となるのは話す人の「エートス」、話されることの「ロゴス」、そして聴く人の「パトス」である(三木清「解釈学と修辞学」)。

さて問題はパトス (Pathos, Passion) である。パトスの語源的な意味は「他からの働きかけを受ける」ということ、つまり受動 (受容) であるが、ここから苦しみを受ける、つまり受難 (受苦) の意味が生じ、更にそこから、苦しみを受けることの激情、つまり「情熱」という意味がでてきた。すなわち、パトスとは受容・受難・情熱ということである。(中村雄二郎「パトス」、『術語集』、岩波書店)。

さて、そうであるなら、説教とはパトスに包まれた言葉である。なぜなら、説教はキリストの受難 (パトス) が語られ、受容 (パトス) され、したがって、そのパトスを聴く者は情熱 (パトス) をもって聴く。情熱 (パトス) をもってキリストの受難 (パトス) を聴く者は、自らも受苦 (パトス) を背負う。まさにこれはルターの「十字架の神学 (theologia crucis)」ではなかろうか。すなわち説教の言葉とは、十字架の言葉である。事実、十字架の

出来事を十字架の主が語られたとき（これがまさしく説教そのものである）、そこにはパトスが拡がっていった。エマオ途上でのことである。「すると二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。二人は『道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか』と語り合った」（ルカ福音書24：31～32）。